

亀城

題字：書道家 平田 洋香

第50号

発行日：令和8年3月17日
発行：一中地区市民委員会
編集：文化広報部会
事務局：一中地区公民館内
TEL：029-821-0104
世帯数：10,620戸
人口：20,114人
(令和8年2月現在)



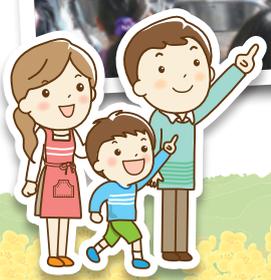
ふれあい
学びあい
第32回

ついで

一中地区 公民館 まつり



令和7年11月16日



こどもの広場

あさがおサロンのから学ぶ地域貢献

土浦一高 2年 齋藤 花怜

昨年の夏休み、私は「あさがおサロン」に高校生ボランティアとして参加しました。あさがおサロンは、小学生が夏休みの間に安心して過ごせる居場所を提供する取り組みで、「子育て世帯を応援する会」と地域の方々、そして高校生が協力して運営しています。私は初めての参加で緊張もありましたが、活動を通じて地域に貢献できる喜びを強く実感しました。

活動は、子どもたちとカードゲームや折り紙をしたり宿題を一緒に考えたりすることが中心でした。最初は人見知りしていた子どもも、私が声をかけたり一緒に遊んだりするうちに少しずつ心を開き、笑顔を見せてくれるようになりました。「また遊ぼうね」と声をかけてもらえたとき、自分の存在が子どもたちに安心感や楽しさを与えられたのだと感じ、胸が温かくなりました。

地域の方々との協力しながら準備や



片付けを行ったことも印象的でした。限られた時間と場所を工夫して運営する姿を見て、地域の支え合いの力を実感しました。さらに、「高校生が来てくれると助かるよ」「子どもたちが安心して過ごせる」と声をかけていただいたとき、自分の小さな行動が子どもたちだけでなく地域全体の力になっていることを知り、責任感と誇りを覚えました。

今回の経験を通じて、地域は世代を超えたつながりによって支えられていることを学びました。子どもたちにとって私は身近なお姉さんのような存在であり、地域を支える一員でもあります。今後もボランティアを続け、地域の方々から信頼される存在となり、自分なりの形で地域社会に貢献していきたいです。

みんなの広場

金魚のお話

蓮河原新町 山本 敦子

我が家では以前、熱帯魚を飼っていた。その水槽に今は体長が10センチ以上に成長した金魚が1匹。私が水槽に近づくと寄ってきて、エサを与えると元気に食べていた。しかし、ある時から全くエサを食べなくなつた。水槽を軽く叩いても近寄って来ない。

金魚がエサを食べなくなる原因を検索すると、水温の低下、水質の悪化、エサの種類など様々あるようだが、特に該当するものは見当たらない。数日エサを与えず様子をみてもやはり食べない。エサを食べないだけでなく、水槽の底の方でじっとして動かないことが多い。まるで「うつ」にでもなったようだ。

こんな症状の金魚を元気にするために、なにか対策を講じなければと考えた。そこで刺激を与えてみることにした。まず夫が水槽を掃除し、そして新しい金魚3匹とブツピー6匹を水槽に入れてみた。

長年1匹で暮らしてきた金魚だったが、この刺激は驚くほどの変化をもたらした。今までじっとして動かなかったのに、3匹の金魚を押し退けてわれ先にエサに近寄る。水槽の中も元気に泳ぎ回る。活動的な金魚に様変わり。

人も金魚も同じなのかもしれない。人と人との関わりや「コミュニケーション」が大切なように、金魚にもひとりぼっち（1匹ぼっち）は決してよい環境ではなかった。水槽は現在、活気に溢れている。

農魂

穴塚町 内山 賢昇

私がまだ小さかった頃。と言っても、もう半世紀を過ぎた頃になります。まだ、お寺の前には刈り取った稲を乾かすために使う木『はぎ木』が多く、秋になりますと沢山の稲が掛かり、まるで秋のカーテンの様な趣で、なんともいえず美味しそうな稲の香りが漂い、幼心にも心躍りました。今ではいけないことですが、皆で耕運機の後ろを追いかけて走ったことを思い出します。その時に転んだ傷跡が暫く残って居たことも良い思い出です。

話は変わりますが、法事の御斎(故

人のご供養とご参加頂きました方々への感謝の気持ちのお食事のことへの席でのことです。壁にある一枚の色紙が目にとまりました。

『農魂(のうこん)』と書かれたその色紙を見て、あるおじさんは「ばーか、いい字らねか(とつてもいい言葉だね)」と褒めていたことを思い出しました。米価高騰の折、あのおじさん達はどんな思いで今もお米を作られていられるのか二ユースを見て思い出しました。

今あらためて調べますと『農魂』とは、「農」が開拓、「魂」が世代への継承を意味するそうです。AIにて調べますと『農魂』とは、農業に携わる人々の精神や情熱を意味する言葉とのこと。

話の前後は忘れましたが、その方によりますと我々の心だと話しておりました。未だに忘れられないのは、その古老が仰っております「今我々は苦しくとも未来の子供達のために米を作っているんだ」と話されていたことです。

40年50年前、自転車で行っていた農道が立派なバイパス道路になり、緑の地平線が住宅地が変わった今、米の価格が庶民の予想より遙か高くなってしまうました。終いには外国

から輸入する始末…現在の様子を知られたらどんな思いかと考えを巡らせました。

今年も美味しい食べ物を作ってください。子供達の未来のために。

土浦の習字文化をつなげよう

習字文化をつなぐ会 大関 まこと

私は、歴史ある水郷土浦のまちの魅力を次世代につなげることを目指す「土浦界限まちづくり研究会」の一員として活動しております。土浦市内で筆を持つ子供たちの習字文化をつなげていきたい思いから、江戸時代後期の教育者である土浦生まれの沼尻墨僊の塾跡である中央一丁目寺子屋亀楽内にて習字教室を行い活動しております。

その活動を通じた中で、昨年からの習字を教えている団体の皆さまのご協力を得て、年に一回「土浦習字文化選書会」という書道展の開催を始めました。

今年も土浦市内の幼稚園児・小学生・中学生・特別支援学校生、そして土浦市内の書道教室に通う園児、児童を対象に開催いたします。

褒賞作品は、中央一丁目内に建在している書道・学問の神、菅原道真公を祭神としている「中城天満宮」

の境内に、今年の中城天満宮奉賛会様のご理解を頂きまして、一年間掲出することとしております。

皆さまのご参加を楽しみにしております。

そして、これからも土浦に習字文化をつなげていくよう活動を続けていきたいと考えております。

○問合せ先

土浦の習字文化をつなぐ会
土浦市中央一丁目1-12-5
寺子屋亀楽内
899-8568
事務局 大関まこと



関東鉄道筑波線
虫掛地区長 紫沼 貞夫

先日、本屋で立ち読みをしていると、ふと懐かしい鉄道写真が目に入ってきた。筑波山を背景に田園地帯の真ん中を走るディーゼル車両、色はベージュと赤の上下二色、昭和六十年ごろまで土浦〜筑波〜岩瀬間を運行していた関東鉄道筑波線である。と言っても今から四十年前前に廃線となっており覚えていないのは年配の方だけかも知れない。廃線後の線路跡地を利用して現在は土浦の観光目玉のひとつであるサイクリングロード(りんりんロード)となっている。

この筑波線を利用していたのは昭和四十年前後のころであるが、その当時は筑波方面からの通勤、通学者や休日には筑波山への観光客などで結構利用者がいたような印象があった。実際、東京方面から常磐線経由で筑波まで向かう乗り入れ車両などもあったようである。

私の住む虫掛町はこの筑波線の沿線にあり土浦駅から二つ目の停車駅であった。立派な駅舎もあり当初は駅員さんもいたが、いつの間にか駅員さんがいなくなり無人駅となっ

てしまった。当駅から別の駅へ行く場合は到着駅の改札口で「虫掛からです」と言つて料金を払い、逆によその駅から戻るときには車両を降りたあとに車掌さんに切符を渡すという、いかにもローカル線といった感じであった。因みに車両のドアの開閉は手動であった。

前述したように今はサイクリングロードに変わり虫掛駅のところは休憩所になっている。時々、私もサイクリングや散歩で利用するが、昔は周りが田んぼばかりで遠く土浦市街や新治の方まで見渡せたが、今は常磐高速、6号バイパスが東西にでき景観がまったく変わってしまった。

昨年は昭和百年ということ、昭和のよき時代の映像などがたびたびテレビなどで紹介されているが、さすがに今もなおその頃の光景が残っているのはなかなか見られない。

土浦市も高速道路や国道および市



虫掛駅 現在の風景

内の各道路が整備され、また、大型店舗などが市街地にできたりとかで、その光景は大きく様変わりしてきた。ただ先日、駅前の最も賑やかな通りだったところに繋がるアーケード街をたまたま歩いたところ、昔からのお店がそのまま残っており(当然店は閉まっているが)昭和四十年ごろにタイムスリップした様な大変懐かしい感覚になった。いつまでもこの光景を保持してほしいと思う反面、旧市街の開発が進まなかった結果かと思うとちょっと複雑な気持ちではあるが…

同好会だより

中国語会話 同好会

謝謝の会 代表 菊地 由佳

令和7年6月から一中地区公民館で開催された話してみよう中国語講座がこの同好会の始まりです。

中国語圏に住んだ経験のある方も若干おられますが、大部分は全くの素人。

動機も中国のドラマや映画の言葉を理解したい、中国語の小説を読みたい、以前に中国語を学習したことがあるからなどなど。

講座は7月末で終了しましたが、講師の韓麗先生は、それぞれの能力に合わせてゆっくりに指導してくださる方で、講座終了時には、もう少しこの先生のもので学習したいと思うようになりました。勇気を出してお願ひしてくれたメンバーの熱意により、9月から同好会として学習することになりました。

中国語といえば難しいというイメージがあります。ニュースなどで聞く中国語はすぐ早くて、字幕付きでもなかなか追いつけない。

中国語の発音や声調が一番のネックになるのではと思います。ラジオやテレビの中国語講座を一生懸命聞いても、自分の口真似と講師の先生とは発音が全然違います。

韓先生は、普通話と呼ばれる日本の標準語にあたる言葉で指導されます。口の開き方、反り舌音、鼻濁音、二重母音、三重母音の発音など、具体的に何度も繰り返し直してくださいます。

とはいえ、日本の漢字と似ているのに結構違う簡体字、アルファベットの表記じゃない!と思うピンイン、声調などなど。

初心者の頭は大混乱することもありますが学生の頃と違って、中間試

験や学年末試験などの締め切りがない世代。先生の励ましのもと、メンバー同士の助言や楽しい掛け合いのお陰で学習が続いています。

去年から始めた方がほとんどです。で、経験のない方も、昔少し学んだという方も、興味のある方はどうぞ一度見学に来て参加してみてください。

国家間ではいろいろ摩擦もあるようですが、文字で記録が残っているだけでも二千年近い交流がある中国。

一市民としては、中国文化の理解に言語は欠かせないと思います。

無理なく楽しくゆっくりと一緒に中国語会話をはじめてみませんか。

青少年育成部事業報告



一中地区市民委員会
青少年育成部長
広江 武

青少年育成部長を昨年仰せつかり、チャレンジクラブ以外の最初の活動が7月の非行防止キャンペーンへの参加でした。土浦駅で学生のみなさんへあいさつ声掛けを行いました。

夏休みには一中地区公民館にて映画鑑賞会を実施しました。「はたらく細胞」というアニメを実写映画化

したもので、子どもたちや大人も、からだの仕組みを学びながら楽しむと思えます。

本年度のチャレンジクラブは、小学生11名を対象に「様々な体験を通じて学び、児童の健全な育成を図ること」を目的に、6月の開校式から1月の閉校式まで7回の活動を実施しました。

6月の開講式では、クラブ員の子どもたちから活動に対する思いや意気込み、そして誓いの言葉を発表してもらいました。開校式の後のお楽しみ会では初めて顔を合わせる子どもたちもおり、椅子取りゲームや紙飛行機飛ばし大会など交流を通して打ち解け、和やかなスタートとなりました。

7月には、霞ヶ浦ラクススマリーナで「ホワイトアイリス号」に乗船。霞ヶ浦の自然や仕組みについて学びました。普段触れることの少ない自然体験に子どもたちは目を輝かせ、環境を守る大切さを感じる機会とな



りました。

9月は原始人の知恵を体験し、ライターやマッチではなく、まいざり式火おこし器で「火おこし」に挑戦。各2人ずつに別れ、煙は出てもなかなか火がつかず、それでも協力しながら何とか全員成功することが出来ました。

10月は、バスに乗り大子町の袋田の滝を見学し、常陸大宮市を訪れ県の無形文化財五介和紙の伝統文化に触れました。袋田の滝の迫力を堪能した後、五介和紙の手すきに挑戦し繊維どうしをバランスよく絡み合わせる難しさ体験しました。

11月の「公民館まつり」では、子どもたちが主体となってポップコーンやジュースの販売、輪投げ大会の手伝いに参加し、売ること、伝えることの楽しさを体験しました。

12月には、笠間市の陶芸工房で粘土をこね、お皿やカップ作りに挑戦。その後石岡市の果樹園でミカン狩りをしました。とても急な坂道をハアハアしながら歩く私の横を元氣よく走りながら抜いていく子どもたちを恨めしく思いました。

締めくくりの1月には、閉講式と「ス・パゲティづくり」を行い、一年間を振り返りを各自発表。

自然・文化・地域交流をテーマに、多くの学びと笑顔にあふれる活動が出来たのではないかと思います。

福祉部について

一 中地区市民委員会 福祉部長
中村 和子

一 中地区市民委員会の福祉部は、民生委員、児童委員、退任され方、そして各町内会役員の方々が活動されており。主な事業として

- 一、見守り活動
 - 二、傾聴ボランティア活動
 - 三、各福祉施設等の訪問研修
 - 四、公民館まつりの参加協力
- があります。一の見守り活動は地区の困りごとや、助けを必要としている人は大丈夫かを把握して、行政へと繋げていく事を目標にひとりひとりが自分のペースで活動しています。二の傾聴ボランティア活動は優しく寄り添える気持ちが大事です。人の話を聞くのは自分の話をするより難しいです。以前傾聴ボランティアの講座研修を部会で受けており、要望があれば何時でも対応出来る状態ですが、コロナ明け以降はいろいろな感染症の影響で、福祉施設での活動承諾が得られていないので、この事業は実施しておりません。また三の福祉施設等の訪問研修も同じ状

況です。傾聴同様早い時期での活動再開を期待しています。四の公民館まつりは、昨年度より開催して部員10名が参加協力しました。定番のスーパースーパーボール、金魚すくい、長い行列が出来、親子で無心に遊んでいる姿はほっこりしました。また赤い羽根共同募金のガチャガチャでは、何が出てくるかわくわくしながらスーパースーパーボールを見られました。一憂の楽しい場面が見られました。福祉の店では菓子やパンは完売し、良い結果が得られて思わずハイタッチしました。疲れもなんのその、楽しい一日を過ごせました。

そして4月の部会で初めて企画した「夏休み子ども祭り」を8月に公民館にて亀城マルシェと同時に開催しました。真鍋の祇園祭りと同じく重なり、暑さもあって参加の子供達は少なかつたが、公民館まつりの出し物と同じくスーパーボールすくい、人気が、あさがおサロンの子供達と、夏休みの思い出づくりに参加できて良かったです。来年度はしっかりと準備し夏まつりを拡大充実出来るように検討したいと思います

今年度最後の事業として「防災について」の研修を各市民委員会と合同で実施予定です。昨今では人災や

天災など、いつ何が起るか分からない時代です。自分の身を守るために、しっかりと学ぼうと思います。以上が福祉部の活動についてです。

臆病になれ!!



一中地区市民委員会
委員長

飯岡 由朗

2週間もの入院を昨年の8月に経験しました。20歳のときに虫垂炎で5日間入院して以来、入院治療は一度もありません。私は、昭和27年生まれの73歳、始めての内視鏡による2度の手術、病名は食道静脈瘤破裂です。

8月10日の朝、突然真っ黒でコールートールのような便が出ました。この便が噂に聞いている下血かと思いましたが、身体の痛み・不快感はありませんでした。すぐに医者に行きたかったのですが、日曜日でホームドクターは休み、休日医は荒川沖や神立と離れていたの、なにもしませんでした。

昼過ぎ2度目のトイレへ、同じでした。もうだめだと思い肝臓の治療をしている学園病院へ電話を掛け事情を説明して、緊急で受け入れてもらいました。まさかすぐに手術・入院とは思っていませんでしたので、自分で車を運転し向かいました。

学園病院到着後、処置室に入り診

察・検査の結果、静脈の出血が確認され、内視鏡による止血手術を行いました。止血処置は、静脈の出血している部分にゴムバンドしキャップをかぶせ、止血をして傷口を壊死させるという処置です。

そのまま入院し5日後、再度内視鏡による検査などから出血が無いか確認し、さらに3カ所のゴムバンドによる止血、そのまま10日ほど入院し、後日の検査結果がよく予定より早く退院できました。(入院時77kg 退院時62kg 15kg減)

退院時、担当医師との面談で言われた言葉が「70歳過ぎたら臆病になって下さい。昨年できた事は、今年もできると思わないで下さい。過信は禁物です。とにかく身体の調子については自分で判断しないこと、まずは医師に相談して下さい。」と思ってもいなかった言葉でした。

70歳、20年前の70歳に比べると確かに若いように思っていました。皆さん容姿は若くても体の中身はそれほど変わっていない?との事ですね。

一番危ないのが、「俺は、大丈夫!」大丈夫でないことがあるんですね。70歳を過ぎたら臆病になりますよ。くれぐれも過信しないことですね。

まだまだ70歳いろんな所で使い道はありますから。皆さんもくれぐれも大事にして下さい。

俳句 さくら俳句会

奥能登の塩や菜飯の味と艶

矢口 征子

幼子の絵本読む声日脚伸ぶ

垣内 かをり

ひらがなが路地いっばいに春を待つ

渡辺 ふみ子

雛祭蔵の座敷の金屏風

今泉 晴美

新川の岸辺に枝に春の鳥

稲葉 由美子

名は知らぬ彼方の森の末に春

金岡 景子

短歌

春風に巻髪ゆれて頬にふれリフレインするあの日の約束

桑田 今日子

新春の五浦に生るる朝の日は空と太平洋へ光をめぐむ

櫻井 雅江

ボックス席膝に掛けられし新聞紙軽きぬもり思い出す早春

齋藤 順子

を頂戴して、より愛される誌面としてゆきたく、引き続きどうぞ宜しくお願い申し上げます。

文化広報部長 小野村 一博

(本号の編集担当者)

小野村 一博/田中 久美子

新井 幸男/石川 幸子

小泉 裕司/山本 敦子

編集後記

文化広報部の部長を引き継いで二年が終わります。読者の皆様ならびに関係各位には大変お世話になりました。前任の新井部長が「読み易い誌面作り(カラー化、子どもの広場、文字を大きくなど)」にご尽力頂きましたが、この二年間、まだまだ改善が足りないと反省中です。読者の皆様からのアイデア

土浦市社会福祉協議会中央支部事業の紹介

社協支部なあに？

社会福祉協議会とは地域住民やボランティア、保健、医療、福祉等の関係者、行政機関の協力を得て、皆様からいただいた社協会費を財源とし、地域福祉を推進する組織です。

土浦市社会福祉協議会では「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」の実現を目指しています。

市内8中学校区の公民館には、地域住民と密接な関係を持ち、協力して地域づくりが行えるよう社協支部として社協職員が1名配置されています。

宅配型食事サービス事業

毎月第2・4水曜日にたまき会が作ったお弁当を高齢者世帯等へお届けしています。

栄養満点で温かいお弁当はお届けする方大変喜ばれています。



ひとり暮らし高齢者会食会



70歳以上のひとり暮らしの方をお招きし、お楽しみ会を行いました。今年度はフラメンコやコーラス、出前講座などを楽しみました。

ひとり暮らし高齢者交流会

70歳以上のひとり暮らしの方を対象に、日帰り旅行を開催しています。

同じ地域の方との交流や外出を楽しむに参加されています。令和7年度はぶどう狩りといちご狩りに行きました。おいしいくだものに参加者の皆さんの笑顔がいっぱいでした。



車いすの貸し出し



公民館では車いすを必要としている方（高齢者や身体障害者等）に対して無償にて車いすの貸し出しを行っています。貸与期間は1週間以内です。

社会福祉協議会中央支部の森川です。社会福祉協議会ではこのほかにも様々な事業を実施しています。福祉に関する困りごとがあれば、お気軽にご相談ください。

土浦市社会福祉協議会中央支部
土浦市大手町13番9号
(土浦市一中地区公民館内)
電話 029-821-0104



新着図書のお知らせ

一中地区公民館の図書室に、以下の図書を入庫しました。来館の際は是非ご覧ください。

- ・大人気シリーズ！
- 大ピンチずかん 2
- 大ピンチずかん 3

- ・人気キャラと科学が学べる
- ポケモンサイエンスブック
- でんき
- ポケモンサイエンスブック
- みず・こおり

- ・話題映画の文庫本
- 国宝 上
- 国宝 下

- ・土浦市が登場するエッセイ
- ナゾの終着駅



「子ども食堂って」 密着取材!

皆さん子ども食堂ってご存じですか？

そう、テレビでも時々ご紹介していますよね。子ども食堂は、地域のボランティアが中心となり手作りの食事を提供し、子どもだけでなく高齢者を含め、どなたでも一緒に利用できる「地域の居場所」となっているんです。

本号は文化広報部編集委員2名で、毎月第四土曜日に一中地区公民館で開催している「つちうらほべたん食堂」を訪ね、提供者、利用者等の皆さんからお話をお聞きしてみました。

◆**まずは、毎回美味しいお弁当を作ってくださいっている「婦人の皆さんにお聞きしました。**

●「食事の準備などは毎回会館開始時間の9時から十名から十三名のメンバーで作り始め、献立はその日の終了時にみんなで話し合い来月の予定を決めているん



です」と。

●「作る際に注意していることは、まずは食中毒予防として手洗い、髪ネットなど衛生面に注意を払うこと。また、心がけていることは、お弁当の見た目の色づかいも大切に、楽しく食べて欲しいんですよ」と、なるほどです。

更に、「皆に美味しい物を食べてほしいな」との気持ちで作っているとのこと、「それっておばあちゃんの味かな」と笑顔で話してくれました。●やっていて良かったと思うことは、「美味しかったよ、の一言が嬉しいね」と、その笑顔が実感でした。

◆**来られた子どもさん達にも感想をお聞きしてみました。**

●子ども食堂を知ったのは、学校からのお知らせや町内回覧板等で知り、一人で来た子どもや、親御さんと来られた子どもも多く、中には毎回来ていると言う子どももいまし



た。また、ご高齢の方々が意外と多いのにも驚きでした。

●お弁当の味は、とお聞きしたところ、子どもさん達をはじめ、皆さん「安く、毎回美味しい」とニコニコ顔で話してくれました。

●また、「子ども食堂の皆さんが優しく声かけて接してくれるので、また来たくなるよ」とも。特に子ども達は「お土産も貰えるんだよ」と嬉しそうに話してくれました。

◆**最後に、毎回お手伝いをしてきているというボランティアの高校生や若い女性の皆さんにもお気持ちを聞きしました。**

●お手伝いしようと思ったきっかけは、ある男子高校生は「子ども食堂はテレビのACジャパンのCMを見て知っていたので」。また女子高校生は「ボランティアサークルで先生からお手伝いしてくれないかと誘われ参加しました」。などそれぞれ応募したという。

●また、やって良かったことは「子どもさん達がお弁当やお土産を楽しそうに受け取ってくれること」、や「来られる色々な人達と知り合いになれたことが良かったです」と。

●更に「自分で考え行動出来るようになったことや、親より上の世代の

人達との関わり方を学ぶことが出来たことは、経験を通じて自分の役に立ちました」と、と爽やかな笑顔で話してくれました。

●中には開設当時からお手伝いしている若い女性もあり、皆さんが好意的にお手伝いしてくれている姿は、取材班としても感謝・感謝の気持ちになりました。

◆**更に取材した当日は、社協本部の特別企画により区内在住の方から昔ながらの「紙芝居」を上演して頂き、子どもさん、ご家族でひとときを楽しんで観ておられました。**



今回、取材を通じて、子ども食堂がどなたでも一緒に利用できる「地域の居場所」であることを改めて感じましたところでした。

取材 文化広報部編集委員

石川 幸子・新井 幸男